

幸福のつばめ

志津小学校長 辻 太一郎

毎年4月頃から、日本各地でツバメの姿を見ることができるようになります。ツバメは春の季語でもあります。人間の生活圏内は、ツバメの外敵が近づきづらいので、あえて家の軒先などに巣を作るともいわれており、私たちにとってとても身近な鳥です。

今年本校校舎3階、6年生教室のベランダにツバメが巣を作り、ヒナもかえって親鳥がせっせと餌を運んでいました。そんなある日の朝、巣が崩れ三羽のヒナがベランダに落ちてしまっていたのです。おそらく前日の強い雨風のせいだと思われます。三羽のうち、二羽は、残念ながら死んでしまいました。子どもたちが手厚く埋葬してくれました。残りの一羽は、生きていました。まだ産毛の若いヒナです。しかし、野生のヒナを拾って人間が育てることは不可能ですし、自然界にあってはむしろ禁止事項です。担任と子どもたちは、様々な葛藤の末、雨風が避けられるよう、また親鳥が見つけれられるよう、そのヒナを小箱に入れ、ベランダにそっと置いてあげました。人間がしてあげられる最善です。これは金曜日の出来事でした。そして週明けの月曜日、担任と子どもたちが恐る恐るベランダを覗いてみると、ヒナは元気でした。しかも、親鳥が餌を運んでいる様子も確認できました。皆、大喜びです。さっそくそのヒナに名前を付けようということになり、募集・投票の結果、「羽芽(うめ)」ちゃんに決定しました。それから一週間後のある日、羽芽ちゃんが、小箱からいなくなっていました。ベランダの周りを見ると、二羽の親鳥の近くにひと回り小さなツバメがいます。羽芽ちゃんです。その日は、6年生の卒業アルバム用写真撮影の日だったのですが、子どもたちは、いつも以上に良い笑顔でした。

ツバメは、昔から幸福を運んでくると言われます。まさにその通りになりました。しかし、この幸福は、たまたま転がり込んできたものではありません。担任と子どもたちが二羽のヒナの死を嘆き、一羽の命を救うために奮闘し、しかし越えられない壁にもぶつかり、それでもあきらめずできる限りのことをして得た幸福です。本当の幸福は、悲しみや困難を乗り越え、努力した結果、得られるということ子どもたちが教えてくれました。

親ツバメは次の年、同じ巣に戻ってくることが多いそうです。来年の6年生にも、ツバメが本当の幸福をもたらしてくれることを願っています。一方、そこで生まれ巣立った子ツバメは、同じ巣には戻らないものの、その近くには戻ってくるそうです。来年、羽芽ちゃんが、志津小学校近くのどなたかのご家庭に幸福を届けてくれるでしょう。

さて、私は、この「メタセコイア」の原稿を書くとき、授業や行事の参観からは見えない、日常の子どもたちの様子を少しでも多くお伝えしたいという思いで執筆しています。とは言え、やはり学校でのお子様の姿を実際に見ることの代わりにはなりませんし、保護者の皆様がそれを心から望んでいらっしゃることも理解しております。今のところ、それが実現できていないことを心から申し訳なく思っております。現在、コロナウイルスは従来株からより感染力の強い変異株に入れ替わろうとしています。今は、最大限の予防策を講じるときだと考えます。その一方で、全国的なワクチン接種も徐々に進み、終息への希望の光が少しずつ見えてつもあります。お子様と保護者の皆様の安全を確保した上で、授業や行事を参観していただく機会を必ず設けます。どうぞそれまで、ご理解・ご協力をお願いいたします。

9月(旧暦8月)を燕去月(つばめさりづき)と言います。親子ツバメたちが日本を去ったあと、しばらくは寂しさを感じると思いますが、その頃には、お子様と保護者の皆様が本校で時間と空間を共有できるようになっていると信じています。